

10月11日 年間第28主日 マタイ22章1～14節 心の礼服を着て婚宴へ

今日の福音は先週に続く箇所なので、やはり長老や祭司長などの指導者に向けて語られたものです。今回はぶどう園ではなく、婚宴に招かれた人々のたとえ話ですが、内容も先週と共通するものとなっています。したがって、「婚宴」は「ぶどう園」に対応しているということになります。

「婚宴」「宴会」は聖書では神とともにある状態、神の国を表しています。ですから、婚宴に招いた王は神であり、そのメッセージを伝えに来た家来たちは預言者を表していると考えられます。家来たちが殺されてしまったことは先週のたとえと共通します。そこでは農夫たちはぶどう園を私物化して、自分たちで利益を独占しようとしたわけですが、今日の招待された人々はそのような権益のためではなかったようです。ではなぜ彼らは招待を拒否し、家来たちを殺してしまったのでしょうか。書かれている理由は畑仕事や商売のためとなっていますが、それならば断わればいいだけの話です。ここでは招待されて拒否した人々は指導者階級の人々を表していると考えられます。やはり彼らが旧約の預言者や洗礼者ヨハネの呼びかけに応じず、苦しみを受けている人々のことを見捨ててしまっていることを表しているのではないのでしょうか。

王はその人たちを滅ぼし、町を焼き払ったということですが、ちょっとやりすぎのように思えます。これは、70年に起こったローマの軍隊によるエルサレムの破壊の出来事が、彼らに対する罰であったとする考え方が取り入れられているようです。

そして王は「町に出て誰でも婚宴に連れてきなさい」と命じます。そしたら善人も悪人も婚宴に集まっていっぱいになったということです。悪人も来ていいのか？と思いますが、この悪人は、長老や祭司長から「罪びと」とみなされていた人々だと考えると、先々週の「娼婦や徴税人が先に神の国に入る」ということを表しているのかもしれません。

最後のところで、「礼服を着ていない人」が一人、追い出されるという出来事が記されています。町を歩いていたら急に婚宴に連れていかれて、「おまえは礼服を着ていない」と言われるのはどう考えても理不尽ですね。というか、その状況では一人どころか、ほとんどの人が礼服を着ていないはずです。そのため、これは婚宴つながりで別々の箇所がつながり合わされたのだと考えられています。

「礼服」を神の呼びかけにふさわしい心と考えると、婚宴に集まった人々は神の呼びかけに従ったわけですから、「心の礼服」を着ている状態です。それに対して、追い出された人は単にごちそうを食べただけかもしれません。あるいは、行くのを拒否した人たちのように神の思いを理解せず、自分の名誉や利益を求めて婚宴にやってきたのかもしれません。神の国は弱い立場の人々が中心であることを知ること、これが「心の礼服」を着ることなのではないのでしょうか。

(柳本神

父)